鑑定

泉鏡太郎

青空文庫

牛屋の手間取、牛切りの若いもの、一婦を娶る、と云ふのがはじまり。漸と女房にありついたは見つけものであるが、其の婦（奇醜）とある。たゞ醜いのさへ、奇醜は弱つた、何も醜を奇がるに當らぬ。

本文に謂つて曰く、蓬髪歷齒睨鼻深目、お互に熟字でだけお知己の、沈魚落雁閉月羞花の裏を行つて、これぢや縮毛の亂杭齒、鼻ひしやげの、どんぐり目で、面疱が一面、いや、其の色の黒い事、ばかりで無い。肩が頸より高く聳えて、俗に引傾りと云ふ代物、青ン膨れの腹大なる瓜の如しで、一尺餘りの棚ツ尻、剩へ跛は奈何。

これが又大のおめかしと來て、當世風の廂髪、白粉をべた〳〵塗る。見るもの、莫不辟易。豈それ辟易せざらんと欲するも得んや。

而して、而してである。件の牛切、朝から閉籠つて、友達づきあひも碌にせぬ。

一日、茫と成つて、田圃の川で水を呑んで居る處を、見懸けた村の若いものが、ドンと一ツ肩をくらはすと、挫げたやうにのめらうとする。慌てて、頸首を引掴んで、

「生きてるかい、」

「へゝゝ。」

「確乎しろ。」

「へゝゝ、おめでたう、へゝゝへゝ。」

「可い加減にしねえな。おい、串戯ぢやねえ。お前の前だがね、悪女の深情ってのを通越して居るから、鬼に喰はれやしねえかツて、皆友達が案じて居るんだ。お前の前だがね、おい、よく辛抱して居るぢやねえか。」

「へゝゝ。」

「あれ、矢張り恐悦して居ら、何うかしてるんぢやねえかい。」

「私も、はあ、何うかして居るでなからうかと思ふだよ。聞いてくんろさ。女房がと云ふと、あの容色だ。まあ、へい、何たら因縁で一所に成つたづら、と断念めて、目を押瞑つた祝言と思へ。」

「うむ、思ふよ。友だちが察して居るよ。」

「處がだあ、へゝゝ、其の晩からお前、燈を暗くすると、ふつと婦の身體へ月明がさしたやうに成つて、第一な、色が眞白く成るのに、目が覺るだ。」

　於稀帷中微燈閃鑠之際則殊見麗人　である。

「蛾眉巧笑※頬多姿、纖腰一握肌理細膩。」

と一息に言つて、ニヤ〳〵。

「おまけにお前、小屋一杯、蘭麝の香が芬とする。其の美しい事と云つたら、不啻毛※飛燕。」

と言ふ、牛切りの嫣々をたとへもあらうに、毛※飛燕も凄じい、僭上の到りであるが、何

も別に美婦を讃めるに遠慮は要らぬ。其處で、
不禁神骨之俱解也。である。此は些と恐しい。
「私も頓と解せねえだ、處で、當人の婦に尋ねた。」
「女房は怒つたらう、」
「何ちゆツてな。」
「だつてお前、お前の前だが、あの顔をつかめえて、牛切小町なんて、お前、怒らうぢやねえか。」
「うんね、怒らねえ。」
「はてな。」
とばかりに、苦笑。
「怒らねえだ。が、何もはあ、自分では知らねえちゆうだ。私も、あれよ、念のために、燈をくわんと明るくして、恁う照らかいて見た。」
「氣障な奴だぜ。」
「然うすると、矢張り、あの、二目とは見られねえのよ。」
「其處が相場ぢやあるまいか。」
「燈を消すと又小町に成る、いや、其の美しい事と云つたら。」
とごくりと唾を呑み、

「へゝゝ、口で言ふやうたものではねえ。以是愛之而忘其醜。」と言ふ。聞者不信。誰も此は信じまい。

「や、お婿さん。」

「無事か。」

などと、若いものが其處へぞろ〳〵出て來た。で、此の話を笑ひながら傳へると、馬鹿笑ひの高笑ひで、散々に冷かしつける。

「狐だ、狐だ。」

「此の川で垢離を取れ。」

「南無阿彌陀佛。」

と哄と囃す。

屠者向腹を立て、赫と憤つて、

「試して見ろ。」

こゝで、口あけに、最初の若いものが、其の晩、牛切の小屋へ忍ぶ。御亭主、戸外の月あかりに、のつそりと立つて居て、

「何うだあ、」

若い衆は額を叩いて、

「偉い、」と云つて、お叩頭をして、

「違ひなし。」

「それ、何うだあ。」

と悦喜の顔色。

於是村内の惡少、誰も彼も先づ一ツ、（馬鹿な事を）とけなしつける。

「試して見ろ。」

「トおいでなすつた、合點だ。」

亭主、月夜にのそりと立つて、

「何うだあ。」

「偉い。」と叩頭で歸る。苟も言にして信ぜられざらんか。屠者便令與宿焉。幾遍一邑不啻名娼矣。

一夜珍しく、宵の内から亭主が寢ると、小屋の隅の暗がりに、怪しき聲で、

「馬鹿め、汝が不便さに、婦の形を變へて遣つたに、何事ぞ、其の爲體は。今去矣。」

と膠もなく、一喝をしたかと思ふと、仙人どのと覺しき姿、窓から飛んで雲の中、山へ上らせたまひけり。

時に其の帷中の婦を見れば、宛としておでこの醜態、明白に成畢ぬ。

屠者其の餘りの醜さに、一夜も側に我慢が成らず、田圃をすた〳〵逃げたとかや。

明治四十四年三月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。
※表題は底本では、「鑑定《かんてい》」とルビがついています。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2011年8月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鑑定

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/